

こんな時代にロシア語のすすめ 第7回

「ペルシア語を目指してロシア語？」

黒田 龍之助



「ロシア語を知っているとほとんどわかってしまうベラルーシ語」

4月です。外国語を始める季節ですね。この春はロシア語を学んでみませんか。

……というような話題を考えたのですが、この先がどうしても浮かびません。似たような話をあちこちで書き散らしていることもあるんですが、それ以前にロシア語を巡る状況は悪化するばかりで、明るい話題が見当たらず、気分がどうにも乗らないことも原因です。

ロシア語の人気の微妙なのは、何もいま始まったことではありません。今年は最底辺だけど、来年こそはよくなるに違いない、いや、これ以上は下がるはずがないのだと、自分を励ますこと数十年。その期待はいつも見事に外れ、最底辺と思われた翌年がさらに落ち込むという、ほとんど底なし沼状態。嗚呼。

本音をいえば、人気は別にどうでもいいんです。負け惜しみじゃありません。世間ではメジャーな外国語、経済的に成長している外国語、明るくて華やかなイメージの外国語がもてはやされることは、分かっているのです。そうでない外国語を選んだことは、なんの後悔もしていません。

ただ、わたしはロシア語教師なんです。授業は教師と受講生で成り立つもの。受講生がいなくなったら、こちらは自動的に仕事なくなります。現に去年の秋学期、火曜2限のロシア語初級は受講生がひとり。このたったひとりの受講生がずば抜けて優秀で、楽しそうにロシア語を勉強してくれるのが唯一の救いでした。それにしても、一對一の授業は受講生にとって精神的に負担なはず。Sさん、最後までつき合ってくれてありがとう。次は中級で会いましょう。

そもそも「外国語のすすめ」って苦手です。わたしの担当する外国語を学ぶと、こんなにいいことがありますよとか、そういうのを喧伝するのってなにか違う。どんな外国語でも、勉強を続けていけば楽しいことが必ずあり、その点ではどの言語も平等なはず。

でもまあ、そんなことはいつてられないので、なにかメリットを考えなければ。

たとえばロシア語は話者人口が多い。かつてに比べれば減ってはいるものの、まだ1億人以上が話しているようですか

ら、世界的に見れば有力言語。さらには国連公用語だから重要だという考え方。大言語主義とでもいいでしょうか。

……う～ん、なにか虚しい。

ナントカ語は話者人口が多いから、さらには国連公用語だから、学んでおけば将来きっと有利になる。まるで先物取引のような危険な誘い。そういうのは嫌いです。だいたいわたしはロシア語だけでなく、あれこれいろんな言語を勉強してきて、それも教えるのが商売。その中には話者人口が1千万人とか、100万人とか、もっと少ない言語だってあります。だからといって、価値が変わるわけではありません。数の力でゴリ押しするのは、多様性の時代に反すると思うのですが、そんな風潮は相変わらず。再び嗚呼。

そういった大言語主義は嫌ですが、それでも影響力のある言語の知識がなければ、勉強が難しい外国語もあります。

たとえばベラルーシ語。かつてベラルーシの首都ミンスクで、ベラルーシ語の夏季セミナーに通ったことがありました。30年近く前の話です。たった2週間でしたが、そもそもベラルーシ語はマイナー過ぎて、日本では教科書すらロクに手に入りませんでした。だから現地で学べたことは、大きな喜びでしたし、勉強も進みました。

ベラルーシ語には、他の外国語と違う事情が二つあります。

まずロシア語ができなければ勉強できません。ベラルーシ語の教材は、ベラルーシ語そのもので書かれたものを除けば、ほとんどがロシア語で説明されています。英語やドイツ語がほんの少しありますが、それはどちらかというとな文法書で、しかもスラブ諸語の知識を前提としている、学術的な内容がほとんど。こういうときは、ロシア語ができて本当によかったと、つくづく感じます。

もうひとつは、ベラルーシ語しかできない人が、たとえベラルーシでもほぼいないことです。夏季セミナーでせっかくベラルーシ語を覚えても、一步街に出れば、そこはロシア語世界。市場でベラルーシ語を使ってみたら、売り子のおばさんから「なんだって？ちゃんと人間らしく話さないよ」といわれてしまいました。これが首都なんですから、悲しくな

ってしまいます。

ベラルーシ語とロシア語は、とても似通っています。そのため、どちらを使っても通じてしまうというのが現状です。ベラルーシ語に自信のないベラルーシ人も多し、たまに自信たっぷりの人がいても、そのことばに耳をじっと傾けてみれば、自分の故郷の方言を使っているのに過ぎないこともありました。コミュニケーションではそれでいいのですが、たとえば標準ベラルーシ語の文法書を書こうとしているときには、それでは困ります。

それでも、そのような状況が理解できたのは、ロシア語を通して多くの人から話を聴いたおかげでした。そもそもいくらベラルーシ語が流暢に話せても、ロシア語ができなければミンスクで生活することはできません。日本人には想像しがたかもしれませんが、そういう現実があるわけです。

しかし、それもまた楽しいんですけどね。

20 年以上前にウズベキスタンを訪れたことは、これまで何度かお話ししました。そのとき首都タシケントの大学で、アメリカ人留学生に会いました。わたしがロシア語の授業を見学していたときの受講生のひとりだったのですが、話を聴いてみれば、彼が本当に学びたいのはペルシア語だということです！

一体どういうことなのか、詳しく聞いてみればこうでした。ペルシア語を志したのはいいものの、アメリカとイランの関係が当時（今も？）よろしくないの、留学できない。そこで似たような言語がないか探したところ、アフガニスタンのダリー語に近いことを知ったのですが、アフガニスタンは当時（今も？）外国人が勉強するどころではありません。そこでさらに探すと、タジキスタンのタジク語は文字こそロシア語と同じキリル文字ですが、文法構造は極めて近いという。しかしタジキスタンも当時（今も？）政情が不安定です。途方に暮れていたところ、ウズベキスタン西部でタジキスタンと国境を接する地域には、タジク語話者がいることを知りました。ウズベキスタンだったら留学ができます。でもそのためにはロシア語と、さらにはウズベク語ができないといけなないので、こうしてロシア語の勉強を始めたというのです。

壮大な話ですよ。でもこの青年は悲しむどころか、むしろいろんな言語を学べるのが楽しくて仕方がない、という感じだったのです。

こういうことはときどきあります。

たとえばわたしのゼミ生で、ヨーロッパ北部のフリジア語に興味を持っている学生がいるのですが、フリジア語を学ぶためにはオランダ語ができなければ、基本的な文献を読むこともできません。南アフリカのコサ語に興味を持っている元ゼミ生は、同じバントゥー語群に属するスワヒリ語を独学しながら、コサ語の文法を掴もうとしています。学習教材が限られている外国語を学ぶためには、このような遠回りをしな

ければならないことがあります。それなのに楽しそうに学習している姿を見ていると、忘れていたなにかを思い出した気がします。そうです、何語でもいいから、いっぱい勉強した方が楽しいんです！

4 月です。外国語を始める季節ですね。この春は何でもいいから、なにか学んでみませんか。



本の紹介

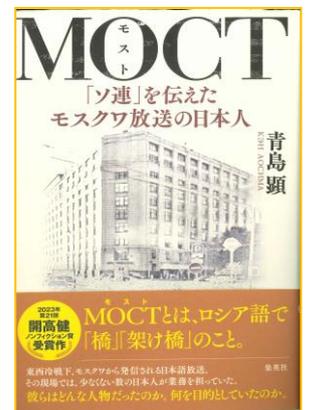
MOCT 「ソ連」を伝えたモスクワ放送の日本人 モスト

第 21 回 開高健ノンフィクション賞
受賞作

青島 顕 著
集英社

四六判 264 頁

価格 1980 円(税込)



「こちらはモスクワ放送です」。

米ソ冷戦の時代、毎日ラジオを通じて呼びかける声が届いた。雑音混じりで少し聞き取りにくかったけれど、それは間違いなく日本海を越えて社会主義国ソ連からやってくる日本語放送の声だった。

著者は高校生の時にたまたまモスクワ放送を聞いたという。アナウンサーが楽しそうに語るロシア語講座にひきよせられた。発音やイントネーションに不自然なところがない日本語に、「いったいどんな人が放送しているのか」と思う。

40 年後にこの謎に挑み、かつてモスクワ放送に携わった日本人たちの群像を描き出したのが本書である。

「MOCT」はロシア語で「橋」を意味する。本書を読むと、確かに日本とソ連（ロシア）の架け橋になろうとした人々の姿が見えてくる。

日本向けモスクワ放送は 1942 年に始まった。初期の日本語放送を支えたのはコミンテルンの活動家としてモスクワに滞在した日本の共産主義者やその家族たちだった。戦後、シベリア抑留の民主運動活動家でそのままソ連に留まった人たちが加わり、やがて 1970 年代や 80 年代には「何か新しいことをやってみよう」とか「学んだロシア語を活かして仕事をしたい」、「本当のソ連社会を見てみたい」と日本からも若者